

FAITH

東洋の禅哲学者として 西洋の近代医学に問う

埼玉医大名誉教授・花園大学教授・禅僧 秋月 龍珉

あきづき・りょうみん

1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院終了。著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案—実践的禅入門』『禅門の異流—一休・正三・盤珠・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者—鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乘—仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。



埼玉医大で十年間、倫理学と宗教学を講義した。その間、私はただ一つのことだけを説いた。それは——君たちはこれから西洋医学を学ぶ。医学は西洋医学だけではない。東洋医学、ことに漢方が最近とみに注目されている。しかし、現代においては、医学の主流は西洋近代の医学である。

ときに、漢方医と称する人々が、「西洋医学は効かないから、ちょっと引っ込んでもらって」などという。そんなとき、私はきびしく反論して言う、「そんなことを言うのは、君自身が医科大学を卒業してから言ってほしい」と。人の生命を扱うのだから、医大六年の就学は最低にして当然のことではないか。針灸師だけの資格で医療の場でものをいうには限度を心得べきであろう。このことは西洋の心理学応用の心理治療ないしカウンセリングのばあいでもまったく同じことである。薬を使わないから取り締まれないといって、野放し状態にしているのは、厚生省の怠慢だと思う。肉体の病気であろうと、精神のそれであろうと、医療には医師の資格が必要である。禅僧などが、「坐禅すればノイローゼなんか必ず治る」と言うのも越権である。

だから、諸君は自信と自負とをもって、西洋医学をしっかり学んでほしい。しかし、ここに一つ大事なことがある。それは、——西洋近代の医学がどんなに勝れていても、その根底にある人間観は、デカルト以来の「近代的自我」の思想である。そこに問題がある。確かに西洋近代のヒューマンイズムはすばらしかった。そこから科学も民主主義も生まれた。しかし、その肝心の「自我」の思想が、ケルケゴールの言うように「死に至る病い」を病んでいたら、どうなのか。近代は必ず終末を迎える。

「ポスト・モダン」が自覚的に探求されなければならない。

このことは、医学においても例外ではない。近代医学の根底にある人間観の問い直しが必要だ。

こんなことを医大の進学課程や附属の高等看護学院

の学生たちに説いていた。そして東京医大の高間直道先生を中心に全国の同志に呼びかけて「医学哲学倫理学会」という学会を創設して、その第一回の会場を引き受けてもらった産業医科大学で、つい、かねての自説を述べた。それを聞かれた当時の同大学長の土屋健三郎先生が、「自分は西洋ヒューマンイズムと東洋ヒューマンイズムの統合なしには、現代の医学教育はあり得ないと思っていたが、いみじくも秋月さんが同じことを言われた」と、深い賛同の意を表してくださった。それ以来、何度も講演や講義の機会を与えていただいた。

では、ポストモダニスト(後近代者)の自覚に立つ新しい(そして、東西統合の)医学とは、何か。それを説くのは、私の任ではない。それを探求するのは新しい科学の創造を目指し、になう医師諸賢の仕事である。ここには、次に二つの具体的な動きにふれて、若干の私見を述べる。

一つには、デカルト以来の物心二元論を超克する「心身医学」の動きである。そこでは、仏教の(単に“道元の”ではない。道元自身、それは“仏教本来の”であると言っている。)^{じんしんいちにょ}「身心一如」の思想が大きく役立つであろう。この方面については、池見西次郎先生の秀れた業績がある。

今一つは、最近の「死の医学」(サナトロジー)の動きである。医学は病気の治療から始まった。そして病気にかからない健康な身体を造る医学に進んだ。しかし、いかに健康に努めても、延命医学が進歩しても、人間は必ず死ぬ。それなら死を看とる医学も必要だ、そこまで来た。死の医学である。しかし、死を考えるのも、人間としてはやはりよく生きるためである。そこで、生(バイオ)と死(サナトス)を考える、「バイオサナトロジー(生死の学)学会」を造ろうということになって、先の土屋先生を中心に(私も発起人になって)、昨年新しい学会ができた。新しい医学の創造を考える各位の入会を希望する。